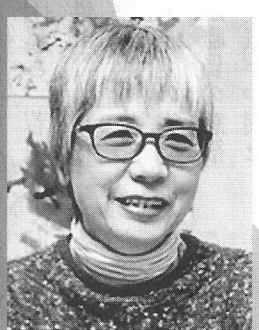
1995年8月10日第三種郵便物認可（毎週1回水曜日発行）
2020年3月31日発行 増刊通巻第7923号 ＳＳＫＳ月刊きょうされんTOMONo.481

空っぽの器に投影されたもの

児玉真美／フリーライター



児玉真美さん
1956年生まれ。京都大学卒業。フリーライター、一般社団法人日本ケアラー連盟代表理事。著書に『海のいる風景　重症心身障害のある子の親であるということ』、近著に『殺す親 殺させられる親』（いずれも生活書院）など。近く『私たちはふつうに老いることができない－高齢化する障害者家族』（大月書店）を刊行予定。

相模原障害者殺傷事件後の議論では、障害者は生きるに値しないという植松の「考え」に多くの人が衝撃を受けているように見える。私自身は彼の「考え」にショックはなかった。２００７年からの10数年間、まさにその命の線引きが世界中にじわじわと広がっている実態を追いかけてきたからだ。

積極的安楽死や医師幇助（ほうじょ）自殺を合法化した国や地域は、２００７年の3カ所から20年3月中旬段階で17カ所と急増している。それに伴い、認知症患者、精神・知的・発達障害者、子どもへと対象者が拡大し、安楽死者からの臓器提供が増えるなど、気掛かりな「すべり坂」現象も広がっている。安楽死は「死に方は自分で決める」個人の権利として喧伝されるが、一方で健康な高齢者や終身刑の囚人への安楽死まで議論され始めて、社会防衛的な人口調整の思惑も透けて見えている。

また医師の判断で「無益な治療」は強権的に引き上げるしくみも広がる。「障害のためＱＯＬが低い命は生きるにも医療にも値しない」という価値観が暗黙裡に広がれば、医師の個人的な価値観によって「無益な治療」論は容易に「無益な患者」論にすり替わりかねない。日本では表立った議論にはならないが、障害児者の周辺で医療と福祉の「兵糧攻め」が進んでいることは、本誌読者も感じているところだろう。

事件が起こる前から世界で進行するこうした事態を懸念していた私には、植松聖は社会の意思を投影されて代行した人物、いわば「空っぽの器」のように見える。この事件で私たちが向かい合うべきは「器」ではなく、そこに投影されたものの正体だろう。なぜなら「兵糧攻め」に追い詰められていくわたしたちは、植松よりももっと隠微な形で社会の意思を「投影」されようとしているのだから。

日本の高齢者や家族は、既に「もう年寄りは医療を遠慮しないと」と「忖度（そんたく）」し始めているし、制度に締め付けられる医療と福祉の関係者も、福祉の含み資産とばかりに介護を担い続けさせられる家族も、疲弊するばかりだ。私は重症者の親の一人として、世界に安楽死の合法化が広がるにつれ、介護家族による恣意的な「自殺幇助（ほうじょ）」事件に社会も司法も寛容になっていくことが、恐ろしくてならない。わたしたちも形は違っても植松のように「殺させられ」ようとしている。事件の本当の恐ろしさはそこにある。

児玉真美さん著書
『殺す親　殺させられる親
―重い障害のある人の親の立場で考える尊厳死・意思決定・地域移行』
出版：生活書院